愛知淑徳大学論集　―心理学部篇―　第13号　2023　21－33

評価懸念が及ぼす登校回避感情への影響

― 友人からのソーシャルサポート満足度に着目して ―

田村 菜々美・清瀧 裕子

要旨

本研究の目的は，評価懸念と友人からのソーシャルサポート満足度（以下友人サポート）によって，登校回避感情がどのように変化するのかを検討することであった。さらに，登校回避感情の下位因子である「対人孤立感傾向」と「学校嫌悪感傾向」それぞれが，評価懸念と友人サポートによってどのように変化するのかを検討した。高校生235名を対象に質問紙調査を行った。結果から，評価懸念は友人サポートに影響しないが，それぞれが独立して登校回避感情に影響することが明らかになった。具体的には，評価懸念は登校回避感情を高め，友人サポートは登校回避感情を低めることが分かった。同様の結果が「対人孤立感傾向」と「学校嫌悪感傾向」においても得られた。以上のことから，友人サポートが周囲と同程度得られていても，評価懸念が高い場合は登校回避感情を抱いていることが明らかになった。つまり，周囲からも友人サポートが得られるような交友関係を築いているように見えていても，本人は登校回避感情を抱いているような潜在群の存在が示唆された。

キー・ワード：不登校，学校，友人，評価懸念

問題と目的

2020年度の高等学校における不登校児童生徒は43,051人であり，昨年に比べて減少したものの，４万人を超えている（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2021）。文部科学省によると，不登校児童生徒とは，「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち，病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義されている。しかし，この不登校児童生徒の定義に該当しない者全員が，抵抗なく登校しているとは限らない。

森田（1991）は登校回避感情はあるが「それでも，一度も休んだことはない」と回答するような，不登校ではなくても我慢して登校している潜在群の存在を明らかにしている。登校回避感情とは，「不登校でなくても，学校に行きたくないと思う気持ち」のことである。加えて，中学２年生を対象として，先述した潜在群，登校回避感情はあるが「遅刻や早退をしたことがあるが休まなかった」と回答した者を遅刻群，「休んだことがある」あるいは「遅刻や早退をしたこともあるし，休んだこともある」と回答した者を欠席群とし，登校回避感情のない出席群の４群の割合について調査した。その結果，潜在群が42.0%，遅刻群は8.0%，欠席群は17.1%，そして登校回避感情がない出席群が27.0%であった。このように，登校回避感情を抱いている生徒は過半数を上回っていることから，登校回避感情は多くの生徒が抱える感情であるといえる。そして，不登校に陥っている生徒は登校回避感情を持った経験がある上に，不登校の状態が深刻になっている者ほど，登校回避感情を持つ頻度が高かったと述べている（森田，1991）。以上のことより，不登校に関係があると考えられる登校回避感情に着目し，登校回避感情の関連要因を検討することが，結果として不登校の予防や緩和に繋がると考えられる。

渡辺・小石（2000）は，登校回避感情尺度を作成し，登校回避感情を学校への反発感傾向，友人

関係における孤立感傾向，登校嫌悪感傾向の３因子に分けた。学校への反発感傾向とは，授業，教師を含め，学校に対する反抗的な感情を指す。友人関係における孤立感傾向とは，友達が少なく，友人関係に対して肯定的な価値を見出していないことを指す。そして登校嫌悪感傾向とは，登校に対しての否定的な姿勢や学校にいる時の不快感を指す。この尺度を用いて，登校回避感情は様々な研究がされている。高校生を対象に研究した有賀（2013）は，登校回避感情と様々な関連要因を検討した。その結果，登校回避感情と対人恐怖心性の間に中程度の正の相関があり，自尊感情と社会的スキルとの間に弱い負の相関があることを示した。加えて，登校回避感情の各因子ごとの関連要因も明らかにしている。具体的には，学校への反発感傾向は，対人恐怖心性や喫煙経験，担任からのサポート，学業場面における非適応感が強く関連していた。友人関係における孤立感傾向は，対人恐怖心性や学校内の友人からのサポートと強く関連していた。そして，登校嫌悪感傾向は，対人恐怖心性や不定愁訴，学業場面における不適応感，学校内の友人からのサポートと強く関連していた。このように，登校回避感情は学業場面における不適応感や自尊感情などの様々な要因と関連しており，中でも対人恐怖心性は登校回避感情のどの因子においても関連していることが分かる。つまり，対人恐怖心性が高いほど，登校回避感情は高くなり，そこには密接な関係があるといえる。

また，登校回避感情は先述した有賀（2013）の研究でも実施されているように，ソーシャルサポートとの関連についての研究が多くなされている（渡辺・小石，2000；陳・島，2019）。ソーシャルサポートとは，「ある人を取り巻く身近な人々からなされる有形・無形の援助のこと」であり，ソーシャルサポートを多く受けられる人ほどストレスの悪影響を受けにくく，心身の健康状態が良いことが明らかにされている（嶋，1994）。渡辺・小石（2000）は，中学生を対象にして，登校回避感情と父親，母親，きょうだい，先生，友だちからのソーシャルサポートとの関連について研究した。その結果，学校への反発感傾向は，５つのサポート資源全てに対する満足度と有意な負の相関があった。友人関係における孤立感傾向は，友達，母親，きょうだい，友だちサポートへの満足度と負の相関があった。登校嫌悪感傾向は，父親，友だちサポートへの満足感と有意な負の相関があった。これらの結果より，どの因子においても負の相関がみられたものは友だちサポートへの満足度であることが分かる。つまり，友人からのソーシャルサポートに満足している人ほど登校回避感情が低くなるといえる。この結果は，陳・島（2019）や有賀（2000）でもみられる。このように，登校回避感情を低める要因として，友人からのソーシャルサポートの重要性が示唆されている。

しかし，どのような人が友人からのソーシャルサポートを十分に受けることが出来ず，登校回避感情を抱いているのかがこれまでの研究では明らかになっていない。そこで本研究は，友人からのソーシャルサポートを十分に受けることが出来ない要因として，評価懸念に注目する。評価懸念とは，「他者からの否定的な評価に対する心配や，否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配」と定義される概念である（Watson, Friend, 1969）。宮前（2012）によると，評価懸念が高い生徒は，他の生徒と比較して友人を傷つけないように気を遣っていることが示された。加えて，身近な級友に相談することが他の生徒に比べて少ないことも明らかになっている。つまり，評価懸念が高い人は，友人に対して気を遣うために消極的な行動をするといえる。そして，評価懸念が高い人ほど友人への援助要請に回避的で，不適応が高い可能性も示唆されている（長谷川ら，2020）。また，評価懸念は仲間との相互作用を妨げ，学級の中での孤立や仲間からの拒絶を導くため，10代での評価懸念の高さが将来の対人関係における不適応を予測する（Warren & Good & Velten, 1984 山本・田上，2002より引用）。これらのことから，評価懸念が高いことで非適応的な側面があるといえる。以上のことから，評価懸念が高い人は，周囲に相談したり援助を求めたりすることが出来ない可能性があるため，親しい友人がいるからといってサポート資源が確保されているとは限らない。これらのことから，登校回避感情を低める要因として考えられる友人からのソー

シャルサポートは，評価懸念の高さによって変化すると考えられる。

以上のことより，本研究は，評価懸念と友人からのソーシャルサポート満足度（以下友人サポート）によって，登校回避感情がどのように変化するのか検討することを目的とする。そして，山本（2007）の教師の視点からみた研究によると，評価懸念は小学生の段階ではある程度客観的に把握することができるが，高校生へと年齢が上昇するに従って徐々に捉えにくいものになっていくことが明らかにされている。つまり，高校生は周りに評価懸念の高さを認識されにくい。そのため，本研究では高校生を対象にすることで，人知れず高い評価懸念を抱えているような潜在群を多く対象にすることが出来ると考えられる。そのため，本研究では調査対象を高校生とする。

本研究の仮説として，評価懸念が高い人は友人からのサポート資源が確保されていない可能性があることから，評価懸念が高い人ほど友人サポートが低いと予測する（仮説１）。また，登校回避感情や登校回避感情の３因子全てと関連があった対人恐怖心性（有賀，2013）は，自己愛との関連が明らかにされており，中でも自己愛の１種である過敏型自己愛は，対人恐怖心性に大きく影響を及ぼすことが明らかにされている（清水，2002）。過敏型自己愛とは，「周囲に対して過剰に気にかける自己愛者」のことであり，他者からの評価に過敏である（清水・海塚，2002）。つまり，他者からの評価に過敏である自己愛者であるということが，対人恐怖心性に大きく影響を及ぼしているといえる。過敏型自己愛は，他者からの評価を気にするという点で，評価懸念と類似性があると考えられる。そのため，評価懸念が高い人も，過敏型自己愛者と同様に対人恐怖心性が高く，登校回避感情が高いのではないか。そして，友人サポートにおいては，友人からのソーシャルサポートを満足に受けることが登校回避感情の低下に繋がることが明らかにされている（有賀，2013；陳・島，2019；渡辺・小石，2000）。以上のことより，評価懸念が高く，友人サポートが低い人ほど，登校回避感情が高いと予測する（仮説２）。

方　法

調査参加者

愛知県のＡ高等学校２年生235名（女性141名，男性90名，その他４名，平均16.25歳，*SD*＝0.45）が調査に参加した。

測定内容

フェイス項目　学年，年齢，性別を尋ねた。

登校回避感情　登校回避感情の測定には，渡辺・小石（2000）の登校回避感情測定尺度を使用した。この尺度は，３因子（学校への反発感傾向，友人関係における孤立感傾向，登校嫌悪感傾向）の計26項目によって構成されており，「全然あてはまらない（１）」から「あてはまる（５）」の５件法で回答を求めた。

評価懸念　評価懸念の測定には，山本・田上（2001a）の評価懸念尺度を用いた。この尺度は，10項目から構成されており，「全然あてはまらない（１）」から「あてはまる（５）」の５件法で回答を求めた。

友人からのソーシャルサポート満足度　友人サポートの測定には，渡辺・小石（2000）のソーシャル・サポート満足度測定尺度を用いた。この尺度は12項目から構成されており，「全然満足していない（１）」から「非常に満足している（５）」の５件法で回答を求めた。

手続き

Ａ高校に調査依頼をし，倫理的な面での協議を重ねた上で調査の許可を得た。そして高校２年生の６クラスの授業にて，学年主任が調査を実施した。各クラスで教示に差が出ることを防ぐために，学年主任にはシナリオを渡して調査を行った。具体的には，（ａ）アンケートへの回答を拒否・中止することができる，（ｂ）個人情報の管理の徹底，（ｃ）ありのままの回答をするなどについて書かれた表紙を各自で読んだ上で，同意するもしくは同意しないにチェックを付けた。全員がチェックを付けたことを確認した後，学年主任によって，「回答後はアンケートを三つ折りにし，茶封筒に入れて封をする」ことが説明された。その際，茶

封筒には予めデブリーフィング用紙が入っており，各自が持ち帰ることにした。以上の教示をした後にアンケートに回答してもらった。調査時期は2021年７月であり，所要時間は約10分であった。

分析対象者

アンケートについて「同意しない」と回答した者，数字に２つ以上の丸がつけていた者，アンケートに不備があった者をデータから除外し，227名（女性137名，男性86名，その他４名，平均16.26歳，*SD*＝.457）のデータを分析に使用した。

結　　果

登校回避感情の因子分析について

登校回避感情の26項目に対して固有値を求めた

Table 1
「登校回避感情」尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	因子負荷量		
	因子1	因子2	共通性
因子1：対人孤立感傾向			
13. 仲のよい友人グループを持っていない	**.64**	-.03	.39
8. 親しい友人がいる	**-.63**	.12	.33
6. 友達と一緒にいると楽しい	**-.58**	.10	.28
19. 私にとって学校はいごこちが悪い	**.53**	.29	.55
18. この学校に対して親しみを感じる	**-.53**	-.14	.38
9. 友達と一緒になって勉強や遊びのグループを作るのは嫌だ	**.51**	.04	.28
10. この学校の生徒であることを誇りに思う	**-.50**	-.16	.36
21. 友達とできるだけ交わるようにしている	**-.48**	.04	.21
25. 友達と一緒にいるより1人でいる方が気が楽だ	**.47**	.12	.30
24. 友達から相手にされなくてもかまわない	**.44**	-.15	.14
26. 勉強以外のことを友達とよく話す	**-.44**	.02	.19
11. 学校の先生に対して親しみを感じる	**-.44**	-.21	.34
因子2：学校嫌悪感傾向			
23. 学校を休みたいという気持ちになる	-.21	**1.01**	.81
7. 授業を受けているのが苦痛である	-.17	**.95**	.75
16. 学校さえなかったら、毎日が楽しいだろうと思う	.22	**.53**	.47
17. 学校に行きたくないと思うことがある	.02	**.42**	.18
2. 学校ではいやなことばかりあると思う	.34	**.39**	.42
因子間相関　因子2	.56		
削除項目			
3. 学校での勉強は、将来の生活や職業に役立つと思う			
20. 学校に対して反発を感じる			
22. 友達とのつきあいがうっとうしいと思う時がある			
1. 学校にいるとき寂しいと思うことがある			
14. 先生には安心して何でも相談できる			
15. 学校の授業は時間のむだだと思うことがある			
12. 授業が終わったらすぐに家に帰りたい			
5. 学校の規則はよく守るほうだ			
4. 授業中でも、おもしろくなければ別の事をしていてもかまわないと思う			

ところ，固有値の減衰状況からは3因子解が示唆された。しかし，3因子を指定して因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果，逆転項目と逆転項目ではない項目が反転した因子が生まれてしまうという問題が生じた。そこで，2因子を指定して因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ，そのような問題が生じなかったため，本研究では2因子解を採用することとした。26項目のうち因子負荷量が.40以下の項目と，2つの因子への負荷量が.35以上ある項目を削除基準とし，基準に該当した計9項目を除外して再度因子分析を行った（Table 1）。全ての項目がいずれかの1つの因子に対して高い因子負荷を示した。回転前の2因子での累積寄与率は37.42%であった。

第1因子には，「仲の良い友人グループを持っていない」や「学校の先生に対して親しみを感じる」等，友人や先生，学校についてなど，主に対人場面で想定される項目が含まれることから，「対人孤立感傾向」因子と命名した。第2因子には，「学校を休みたい気持ちになる」や「学校さえなかったら，毎日が楽しいだろうと思う」など，学校に対して嫌悪感を示すことが想定される項目から構成されるため，「学校嫌悪感傾向」因子と命名した。

各尺度の記述統計

次に，登校回避感情，登校回避感情の下位尺度である対人孤立感傾向と学校嫌悪感傾向，そして評価懸念，友人サポートについて，逆転項目を処理した。そして，各尺度の信頼性を検討した（Table 2）。その結果，全ての尺度のα係数が.80を超えており，内的整合性は十分であった。それぞれの平均値，標準偏差，最大値，最小値をTable 2に示す。

各尺度間の相関

登校回避感情と，登校回避感情の下位尺度である対人孤立感傾向，学校嫌悪感傾向，そして評価懸念，友人サポートとの相関係数を産出した。結

Table 2
各尺度の平均値，標準偏差，信頼性

	α	*M*	*SD*	*Max*	*Min*
登校回避感情	0.87	2.14	0.57	3.94	1.00
対人孤立感傾向	0.83	2.05	0.55	3.75	1.00
学校嫌悪感傾向	0.81	2.36	0.87	4.80	1.00
評価懸念	0.90	3.34	0.94	5.00	1.00
友人サポート	0.96	4.07	0.78	5.00	1.00

Table 3
変数間の相関係数

	登校回避感情	登校回避感情		評価懸念	友人サポート
		対人孤立感傾向	学校嫌悪感傾向		
登校回避感情	ー				
対人孤立感傾向	.93 **	ー			
学校嫌悪感傾向	.83 **	.56 **	ー		
評価懸念	.36 **	.30 **	.35 **	ー	
友人サポート	-.63 **	-.68 **	-.38 **	-.12	ー

*** $p < .001$. ** $p < .01$.

果はTable3の通りであった。

評価懸念と友人サポート間の検討

評価懸念が友人サポートに与える影響を検討するため，友人サポートを従属変数，評価懸念を独立変数とする回帰分析を行った（Table 4, Figure 1）。その結果，有意な関連は認められなかった。

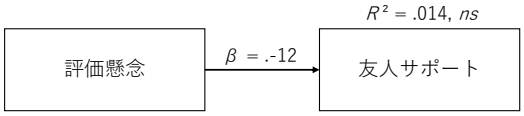

Figure 1. 友人サポートを従属変数，評価懸念を独立変数とした回帰分析の結果。

登校回避感情と評価懸念・友人サポートについての検討

登校回避感情の規定因を検討するために，登校回避感情を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析を行った。その結果をTable 5，Figure 2に示した。自由度調節済み決定係数は.480であり，評価懸念と友人サポートによって，登校回避感情の成分の48.0%を説明していた。相関分析の結果と同様に，評価懸念は登校回避感情と有意な正の関連を示した。一方，友人サポートは，登校回避感情と有意な負の関連を示した。したがって，評価懸念が高いほど登校回避感情が高いこと，友人サポートが高いほど登校回避感情が低いことが示された。

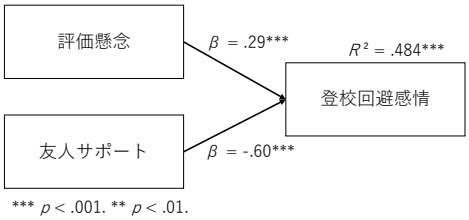

Figure 2. 登校回避感情を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析の結果。

次に，対人孤立感傾向の規定因を検討するために，対人孤立感傾向を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析を行った。その結果をTable 6，Figure 3に示した。自由度調節済み決定係数は.509であり，評価懸念と友人サポートによって，対人孤立感傾向の成分の50.9%を説明していた。相関分析の結果と同様に，評価懸念は対人孤立感傾向と有意な正の関連を示した。一方，友人サポートは，対人孤立感傾向と有意な負の関連を示した。したがって，評価懸念が高いほど対人孤立感傾向が高いこと，友人サポートが高いほど対人孤立感傾向が低いことが示された。

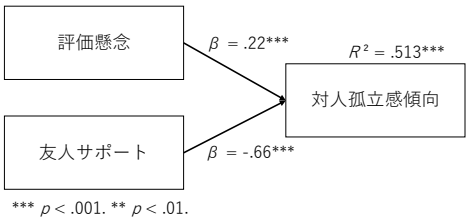

Figure 3. 対人孤立感傾向を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析の結果。

最後に，学校嫌悪感傾向の規定因を検討するために，学校嫌悪感傾向を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析を行った。その結果をTable 7，Figure 4に示した。自由度調節済み決定係数は.236であり，評価懸念と友人サポートによって，学校嫌悪感傾向の成分の23.6%を説明していた。相関分析の結果と同様に，評価懸念は学校嫌悪感傾向と有意な正の関連を示した。一方，友人サポートは，登校回避感情と有意な負の関連を示した。したがって，評価懸念が高いほど学校嫌悪感傾向が高いこと，友人サポートが高いほど学校嫌悪感傾向が低いことが示された。

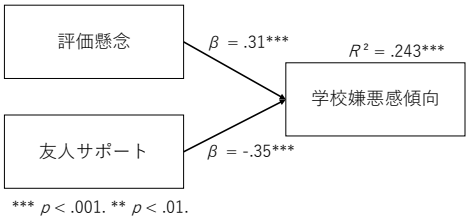

Figure 4. 学校嫌悪感傾向を従属変数評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析の結果。

Table 4
友人サポートを従属変数，評価懸念を独立変数とした回帰分析の結果

	偏回帰係数	標準誤差	95%信頼区間 下限	95%信頼区間 上限	標準化 偏回帰係数
評価懸念	-0.10	0.05	- 0.21	0.01	- .12
R^2 = .243***					
adj. R^2 = .236					

*** p < .001. ** p < .01.

Table 5
登校回避感情を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析の結果

	偏回帰係数	標準誤差	95%信頼区間 下限	95%信頼区間 上限	標準化 偏回帰係数
評価懸念	0.18 ***	0.03	0.12	0.12	.29
友人サポート	-0.44 ***	0.04	-0.51	- 0.37	-.60
R^2 = .484**					
adj. R^2 = .480					

*** p < .001. ** p < .01.

Table 6
対人孤立感傾向を従属変数，評価懸念と友人サポートを独立変数とする重回帰分析の結果

	偏回帰係数	標準誤差	95%信頼区間 下限	95%信頼区間 上限	標準化 偏回帰係数
評価懸念	0.13 ***	0.03	0.08	0.18	.22
友人サポート	-0.47 ***	0.03	-0.53	- 0.40	-.66
R^2 = .513***					
adj. R^2 = .509					

*** p < .001. ** p < .01.

考　　察

本研究は，評価懸念と友人サポートによって，登校回避感情がどのように変化するのかを検討することを目的とした。さらに，登校回避感情の下位尺度である対人孤立感傾向と学校嫌悪感傾向それぞれが，評価懸念と友人サポートによってどのように変化するのかを検討した。

評価懸念と友人サポートについて

本研究の仮説として，評価懸念が高い人ほど友人サポートが低いと予測した（仮説１）。研究の結果，仮説１は支持されなかった。仮説１が支持されなかった理由として，評価懸念の高さによる配慮行動が関係していると考えられる。上瀧・重橋（2016）によると評価懸念が高い人は，自分志向だけでなく，他者志向的な配慮によって発言が抑制されることが明らかになっている。加えて，山本・田上（2001）は，評価懸念の高さが他者配慮的な行動に結びつくとすれば，それはある程度環境によって重んじられる特性であるかもしれないと述べている。つまり，評価懸念が高い人は，

他者に配慮した行動をすると考えられる。渡辺（2010）は，友人関係における行動と適応との関係を調査した。その結果，友人関係における配慮行動が高いほど雰囲気の維持を行うことが多く，対人劣等頻度や対人葛藤頻度が高かった。つまり，他者に配慮した行動を取ることが，雰囲気を維持することに繋がると考えられる。そして，井邑・高田・塚脇（2012）の断り方についての研究によると，謝罪群と直接的断り・他者配慮的断り群は，他の群に比べてポジティブ感情や友人サポート得点が高いことが明らかになっている。つまり，他者への配慮を示すことによって，断られた相手は嫌な感情を抱かず良好な関係を保つことができる上に，自分自身が困った時にもサポートを得やすくなると考えられる。すなわち，他者に配慮した行動が関係の維持に繋がるだけでなく，関係が維持されたことによってサポートも得られる可能性が示唆されている。以上のことより，評価懸念が高く周囲に援助要請が出来なくても（長谷川・高橋，2020），周囲と関わる際に配慮が生じたことにより，自然と他者からのサポートを得ることが出来たと考えられる。よって，評価懸念が高い人ほど友人サポートが低くなるという仮説１は支持されなかったのであろう。

登校回避感情の因子について

本研究では，登校回避感情尺度において，因子分析によって２因子解が採用された。渡辺・小石（2000）は，登校回避感情尺度を作成する際に「学校適応」，「友人志向」，「登校回避傾向」という３つの視点で登校回避感情を捉えようと意図したことから３因子解を採用していた。しかし，本研究の因子分析では，「学校適応」と「友人志向」と捉えられるものが主に１つの因子にある上に，友人だけでなく，学校や教師など，対人場面を想定する項目が多いことから，それらをまとめて対人孤立感傾向と命名した。そして，もう１つの因子は，登校回避傾向と捉えられる因子である上に，学校に対する嫌悪感が強かったため，学校嫌悪感傾向と命名した。

林田・黒田（2018）によると，学校適応感における「居心地の良さ」と「被信頼感・受容」は，教師との関係および友人関係への満足感と正の関連があることが明らかにされている。つまり，教師や友人関係への満足感が高いほど，学校での居心地が良く，信頼感や受容を感じられるといえる。加えて，親子関係が不安定なまま育った生徒であっても，学校内の対人関係に満足していることが補償的に働き，学校適応感が高められる反面，学校内の対人関係に満足できていない場合は，親への愛着の良好に関わらず高い学校適応感が得られにくいことが示唆された（林田・黒田，2018）。これらのことから，学校適応において，対人関係が大きく関わっているといえる。このように，登校回避感情尺度が作成された2000年から約20年経過したことで，学校生活における教師や友人関係の重要性が増加し，それらの関係と学校適応が隣り合わせの関係になった可能性があると考えられる。よって，「学校適応」と「友人志向」が１つの因子の中に含まれたのであろう。

登校回避感情と評価懸念・友人サポートについて

本研究の仮説として，評価懸念が高く，友人サポートが低い人ほど，登校回避感情が高いと予測した（仮説２）。調査の結果，仮説２は支持された。仮説２が支持されたことは，友人サポートにおいては先行研究と一致する結果であった（有賀，2013；陳・島，2019；渡辺・小石，2000）。評価懸念においても，普段は明るく適応的に行動していた生徒がいきなり不登校になった際の原因として示唆されていた評価懸念の高さ（宮前，2012）が，本研究によって明らかにされたといえる。そして，登校回避感情の下位尺度である学校嫌悪感傾向と対人孤立感傾向においても，仮説２と同様に，評価懸念が登校回避感情に正の影響，友人サポートが登校回避感情に負の影響を及ぼすことが明らかとなった。

仮説２が支持された上に，登校回避感情の下位尺度の学校嫌悪感傾向でも同等の結果が得られた理由として考えられるものを以下に記す。まず，評価懸念においては，評価懸念が高いことによる自己の捉え方と，評価を受けるという学校現場の特徴が関係していると考えられる。上瀧・重橋（2016）によると，評価懸念が高い人ほど理想自

己と現実自己にずれがあることが明らかにされており，高い理想自己を有しているといえる。つまり，評価懸念が高い人は，他者からの否定的な評価に不安がある（Watson & Friend, 1969）ため，現実よりも高い理想を抱いている。そして，理想自己と現実自己のずれは「失望・不満」「恥・ばつの悪さ」のようなネガティブな感情を生み出す（榎本, 1998）上に，自尊感情および自己評価の低下を引き起こすこと（遠藤，1992；水間，1998）が示された。このように，理想自己と現実自己のずれがあることによって，ネガティブな感情を生み出したり，自尊心や自己評価を低下させたりしてしまう。加えて，大塚・網谷（2011）によると，理想自己と現実自己のずれが大きい方が，学校嫌い感情が高い傾向があることが明らかにされている。そして，大塚・網谷（2011）は，個人の能力や言動などに対して何かしらの評価を受ける学校へ通うということは，理想自己の確立へ向けて努力している途中での評価を受けることを意味しており，理想の自分とはかけ離れた評価を受ける恐れがあり，それにより学校ぎらい感情を高めるのだろうと述べている。以上のことから，評価懸念が高いことで他者からの否定的な評価を恐れて理想自己が高まり，それによって現実自己とのずれが生まれることで，ネガティブな感情が生み出されたりマイナスな評価をしたりしてしまう。その中で，学校で理想自己からかけ離れた現実的な評価を受けた結果，学校ぎらい感情が高まり，登校回避感情における学校嫌悪感を抱えてしまうのではないだろうか。

次に，友人サポートにおいては，ソーシャルサポートがストレスの対処に関係していることが理由として挙げられる。ソーシャルサポートにおいて，高校生は，主に友人をサポート源にすることが明らかにされている（渡辺・蒲田，1999）。そして，菊島（1997）によって，不登校・不登校傾向群は，一般群に比べてソーシャルサポートを受けることができると感じている者が少ないことが示された。加えて，ソーシャルサポートの存在によって，遭遇した出来事のストレス度が低く評価され，不登校傾向が予防される働きと，強いストレスを受けてしまった場合でも，ソーシャルサポートが衝撃度を緩和することで不登校傾向に陥ることを抑制する働きという 2 通りの有効性も示唆している。つまり，ソーシャルサポートは学校場面における様々なストレスを緩和する役割を果たすと考えられる。また，ソーシャルサポートが学校肯定感に正の影響を及ぼすことも明らかになっている（大対，2011）。そのため，そのような効果のあるソーシャルサポート（友人サポート）を受けることが出来ない場合は，学校場面におけるストレスを抱えた場合，そのストレスを減少させることが出来ずに募らせてしまうために学校への肯定感が低下し，登校回避感情における学校嫌悪感を抱えてしまうのではないだろうか。

そして，仮説 2 が支持された上に，登校回避感情の下位尺度である対人孤立感傾向でも同等の結果が得られた理由を以下に記す。まず，評価懸念においては，評価懸念が葛藤と関係していることが理由として考えられる。中島・五十嵐（2012）は，評価懸念が高いと葛藤も強くなることを示した。加えて，山本・田上（2003）は葛藤を生じるような対人関係は評価懸念を高めるきっかけになることを明らかにしている。つまり，評価懸念と対人関係などの葛藤は，それらを高め合うという形での関連があると考えられる。そして，先述した通り，評価懸念が高い人は他者に配慮した行動をする（上瀧・重橋，2016；山本・田上，2001）。配慮行動において，先述した通り，友人関係における配慮行動が高いほど雰囲気の維持を行うことが多く，対人劣等頻度や対人葛藤頻度が高いことが明らかにされている（渡辺，2010）。つまり，評価懸念と対人関係などの葛藤が関連する背景には，配慮行動が関係していると考えられる。配慮行動において，渡辺（2009）によると，他者に対する配慮が過剰になることで自己表現が阻害され，精神的適応が低下する可能性が示唆されている。王暁（2017）によると，友人に対する評価懸念は，過剰適応に影響を与えることが示された。過剰適応の外的側面として他者配慮が挙げられるため（石津，2006），評価懸念が高い人は他者に対する配慮も過剰になる可能性があると考えられる。以上のことより，評価懸念が高いことで配慮行動が生じ，対人関係における葛藤が高まる上に，配慮

行動が過剰になり，精神的な適応も低下することで，登校回避感情における対人孤立感を抱いたと考えられる。

次に，友人サポートにおいては，友人との付き合い方や孤立感が関係していると考えられる。和田（1992）によると，ソーシャルサポートは孤独感と強く関連し，中でも友人からの情緒的サポートが負の関連という形で最も関連することが明らかにされている。つまり，友人サポートが得られない人ほど，孤独感を抱いてしまうといえる。このように，友人サポートが得られないために孤独感を抱き，登校回避感情における対人孤立感を抱いたと考えられる。一方で，友人関係の分類において，友人との関わりを避けるような友人関係回避群は，援助要請にも回避的であり，ソーシャルサポート受容が低い上に，他の群に比べて学校に対して居心地の良さを感じられていないことが示された（永井，2016）。友人関係回避群は，関わりを避けるという点で対人孤立感傾向の側面があるといえる。そのため，そもそも対人孤立感を抱いており，他者との関わりを避けていたために，友人サポートが得られなかった可能性も考えられる。

今後の課題

本研究は，評価懸念と友人サポートによって，登校回避感情がどのように変化するのかを検討することを目的とした。調査の結果，評価懸念の高低によって友人サポートは変化しないが，評価懸念と友人サポートは登校回避感情にそれぞれ影響を及ぼしていることが明らかにされた。つまり，友人サポートが周囲と同程度得られていても，評価懸念が高い場合は登校回避感情を抱いているといえる。すなわち，周囲からも友人サポートが得られるような交友関係を築いているように見えていても，本人は登校回避感情を抱いているような潜在群の存在が示唆された。このように，一見適応的に見える生徒であっても，実際は評価懸念が高かったり，登校回避感情を抱いていたりする可能性があったりするため，学校現場において一人ひとりに丁寧に向き合う必要性があり，評価懸念が高い人に対して効果的な介入方法を見出すことに意義があるといえる。しかし，本研究ではそのような意義が見出されたものの，評価懸念が高い人に対しての効果的な介入方法が明らかになっていない。以上のことより，登校回避感情を高めることや，その先の不登校を予防したり緩和したりすることが出来るような支援へと繋げるために，評価懸念が高い人に対する効果的な介入方法を今後検討する必要があると考えられる。

また，本研究では進学校である公立高校１校を対象とした。大久保（2005）によると，進学率が20％程度の困難校に比べて，進学率が90％を超える進学校の方が，学校生活における友人との関係得点が有意に高かった。つまり，進学校は困難校に比べて友人関係が学校生活に関係しているといえる。藤原・河村（2014）も，進学校では学校生活満足度において友人との関係，学習意欲，進路意識が最も関連していることを明らかにしている。これらのことから，進学校は友人関係を重要視するといえる。そして，藤原・河村（2019）のソーシャルスキルについての研究によると，進学校は，進路多様校や非進学校に比べて，能動的なかかわりや自己主張など，対人関係の形成に関連したかかわりのスキルが高い上に，非進学校に比べて対人関係や学校生活を送る上でのルールやマナーなど，対人関係の維持に関連した配慮のスキルが高いことが明らかにされている。つまり，進学校の生徒は対人関係を形成したり維持したりするようなソーシャルスキルが高いといえる。以上のことより，進学校では友人関係を重要視する上に，ソーシャルスキルが高いため，本研究で対象にした進学校では，どのような相手に対しても友人サポートが与えられやすく，同時に友人サポートが得られていると感じることが出来た可能性があると考えられる。それにより，評価懸念が高い人であっても評価懸念が低い人と同等のサポートが得られた上に，登校回避感情の平均値が2.14と比較的低かったのかもしれない。よって，今後の研究では進学校だけでなく非進学校や進路多様校も研究対象に加え，検討する必要がある。そうすることで，高校生全体としての登校回避感情を検討することが出来る上に，学校の種類別での適切な介入方法を検討することにも繋がるという点で意義があるだろう。

付　記

本論文は，第一著者が2022年度に愛知淑徳大学心理学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

謝　辞

本論文の作成にあたり，調査にご協力くださったA高等学校の生徒および先生方に，心より感謝申し上げます。

引用文献

有賀 美恵子（2013）．高校生における登校回避感情の関連要因 日本看護科学会誌，*33,* 12-24.

陳 燕群・島 義弘（2019）．中学生の登校回避感情に与える要因の検討――学校の規模・学年とストレッサー，およびソーシャルサポート―― 日本心理学会総会発表論文集*61,* 606.

榎本 博明（1998）．「自己」の心理学――自分探しへの誘い―― サイエンス社

遠藤 由美（1992）．自己認知と自己評価の関係――重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討―― 教育心理学研究，*40,* 157-163.

藤原 和政・河村 茂雄（2014）．高校生における学校適応とスクール・モラールとの関連――学校タイプの視点から―― カウンセリング研究，*47,* 196-203.

藤原 和政・河村 茂雄（2019）．高校生におけるソーシャルスキルと学校生活満足度との関連――学校の特性の視点から―― カウンセリング研究，*51,* 157-167.

長谷川 彩香・高橋 知音（2020）．評価懸念および気遣いと親しい友人への被援助志向性との関連 信州心理臨床紀要，*19,* 95-106.

林田 美咲・黒川 光流・喜田 裕子（2018）．親への愛着および教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響 教育心理学研究，*66,* 127-135.

井邑 智哉・高田 純・塚脇 涼太（2012）．友人からの要求に対する児童の断り方と心理的ストレス反応，ポジティブ感情，友人からのソーシャルサポートとの関連 学校メンタルヘルス，*15,* 59-66.

石津 憲一郎（2006）．過剰適応尺度の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集，137.

菊島 勝也（1997）．不登校傾向におけるストレッサーとソーシャル・サポートの研究 健康心理学研究，*10,* 11-20.

宮前 淳子（2012）．中学生の評価懸念と友人のつきあい方との関連 香川大学教育実践総合研究，*24,* 145-152.

水間 玲子（1998）．理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究，*46,* 131-141.

文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2021）．令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省ホームページ Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf（2021年11月10日）

森田 洋司（1991）．「不登校」現象の社会学 学文社

永井 暁行（2016）．大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究，*64,* 199-211.

中島 美紀・五十嵐 哲也（2012）．中学生の相互独立性・相互協調性と友人関係との関連 愛知教育大学研究報告，*61,* 67-74.

大対 香奈子（2011）．高校生の学校適応と社会的スキルおよびソーシャルサポートとの関連――不登校生徒との比較―― 近畿大学総合社会学部紀要，*1,* 23-33.

大塚 翔史・網谷 綾香（2011）．理想自己と現実自己のズレが学校ぎらい感情に及ぼす影響 佐賀大学文化教育学部研究論文集，*15,* 299-307.

王暁（2017）．中学生における対象別評価懸念と過剰適応の関連についての日中比較 東北大学外学院教育学研究科研究年報，*65,* 61-71.

大久保 智生（2005）. 青年の学校への適応感とその規定要因――青年期用適応感尺度の作成と学校別の検討―― 教育心理学研究, *53,* 307-319.

嶋 信宏（1994）. 高校生のソーシャル・サポート・ネットワークの測定に関する一研究 健康心理学研究, *7,* 14-25.

清水 健司・海塚 敏郎（2002）. 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, *50,* 54-64.

上瀧 淳子・重橋 のぞみ（2016）. 演習場面における大学生の理想自己・現実自己の差と発言行動との関連――評価懸念という視点を取り入れて―― 福岡女学院大学大学院紀要, 25-32.

和田 実（1992）. 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, *40,* 386-393.

渡辺 麻美（2009）. 高校生における主張性の4要件と精神的適応との関連 心理学研究, *80,* 48-53.

渡辺 麻美（2010）. 高校生の主張性の4要件と友人関係における行動および適応との関連 心理学研究, *81,* 56-62.

渡辺 麻美・蒲田 いずみ（1999）. 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル――登校児と不登校児の比較―― 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）, *49,* 337-351.

渡邊 葉一・小石 寛文（2000）. 中学生の登校回避感情とその規定要因――ソーシャル・サポートとの関連を中心にして―― 神戸大学発達科学部研究紀要, *8,* 1-12.

Warren, R., Good, G., & Velten, E.（1984）. Measurement of social-evaluative anxiety in junior high school students. *Adolescence, 19,* 643-648.（山本 淳子・田上 不二夫（2002）. 中学生の評価懸念の高さと自己概念特徴との関連 筑波大学心理学研究, *24,* 263-272.より引用）

Watson, D., & Friend, R.（1969）. Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of consulting and clinical psychology, 33,* 448-457.

山本 淳子（2007）. 教師の視点からみた思春期の子どもの評価懸念に関する研究 香川大学教育実践総合研究, *14,* 93-10.

山本 淳子・田上 不二夫（2001a）. 評価懸念尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, *43,* 180.

山本 淳子・田上 不二夫（2001b）. 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究, *39,* 37-46.

山本 淳子・田上 不二夫（2002）. 中学生の評価懸念の高さと自己概念特徴との関連 筑波大学心理学研究, *24,* 263-272.

山本 淳子・田上 不二夫（2003）. 思春期における対人経験と評価懸念との関連――自伝的記憶による探索的検討―― 教育相談研究, *41,* 21-38.

Influence of evaluation concerns on school avoidance emotions: Focusing on satisfaction with friends' social support

Nanami Tamura and Yuko Kiyotaki

Abstract:

This study examined how feelings regarding school avoidance are affected by concerns about evaluations and satisfaction with social support from friends (“friend support”). We also discussed how the sub-factors of school avoidance feelings, including “interpersonal isolation tendency” and “school aversion tendency,” were affected by concerns about evaluations and friend support, respectively. We administered a questionnaire survey to high school students (N=235). The results indicated that evaluation concerns did not affect friend support. However, these factors independently affected school avoidance feelings, such that evaluative concerns increased and friend support decreased it. We obtained similar results concerning the “tendency toward interpersonal isolation” and “tendency toward school aversion. These findings indicate that students have school avoidance feelings if they have high evaluative concerns, even if they have a similar level of support from their friends and peers. This study suggests that a latent group of students with established friendships who receive support from their surroundings nevertheless experience feelings of school avoidance.

Key words: school avoidance feelings, school, friends, evaluative concern